

心のシャッター

2024. 1. 12

こちらが言ったことに対してポンとすぐに反応してくれる、やろうとしてくれる人がいる。無駄な時間が要らない。どんどん伸びていく。反対に、自分の理屈や考えを通して、こちらが提案したことを素直に受け入れない人がいる。そういう人は、心のシャッターを下ろしていると言える。シャッターを下ろしていないまでも、心にバリアをつくっている人は多い。

そういう人は損である。「一回受け入れてみたら」「自分を守って得をしていると思っているかもしれないが、実は損をしているよ」「理屈はいいからまずはやってみたら」「人の助言を一回試す勇気をもちなさい」「何でもおもしろがってやってみないと」

人間には、限界はないのだろう。自分の心がつくっているだけである。素直な人は、自分の可能性を引っ張っていくことができる。自分の理屈や考えをもつことはわるいことではない。だが、そのことにいつまでも固執しているのはどうなのだろうか。

教員は、その特性として、心のシャッターを下ろす傾向はないだろうか。心にバリアをつくるタイプが多くはないだろうか。何かを提案する。「それ、おもしろそうですね。やってみましょう」という人が多ければ、もうとっくに授業は改善され、働き方改革も進んでいたことだろう。

では、自分はどうなのか。若い頃は、素直だったとは言い難い。だが、面白くなそうな顔をしながらも、人の話は聞いていた。印象はわるかったに違いない。そのときは、素直に聞いているような態度ではなかったかもしれない。だが、後から、言われたことを振り返り、じっくりと考えるようなタイプだった。したがって、人の話は聞いている。

昔から、何かアイデアがあると、面白そうだからやってみようというタイプだった。だから、授業でも、部活動でも、いろいろなことを試してきた。その結果、気づいたこと、わかったことがたくさんある。そのうちに、こうやればいいのかとわかるようになってきた。自分のタイプは、今も変わらない。だが、もう一人の自分がいて、ちょっと待て。よく考えてみろ。そう語りかける。そこで、メリット、デメリットを天秤にかけ、総合的に判断することとなる。自分の立場、責任の重さが、そうさせる。

なぜ、教員の中には、心のシャッターを下ろす人がいるのだろうか。その人の性格もあるが、きっと、人から言われたくないのではなからうか。それだけ、プライドが高いのかもしれない。プライドは必要だが、ときにそれが邪魔をすることがある。経験が、妨げとなることもある。

今までこうやってきました。こういう人がいる。全く変わろうとしない。自分ではなく相手が変わると考えるタイプである。今までやってきたことが通用しないのだから、変わるしかない。変わらない人には、魅力はない。子どもは、そのことを敏感に感じている。

今では、子どもでも大人でも同じだが、なぜそういう反応をするのかという、その人がもっている背景にも思いを寄せるようになってきた。そうしないと、物事は解決しない。表面的な態度や反応だけで考えていては、真の解決には至らない。